

ある読者からのお便り（シリーズ2「Who cares?」）を読んで

戸田 竜也

本稿を通じて、私は「ケア」という言葉にこれほどまでに重層的な意味が隠されていたのかと驚きを覚えた。英語の“care”と日本語の「ケア」との語感の違いに始まり、アニメの一場面から抽出された“Who cares?”と“I DO!!”の対比は、まさにケアという営為がいかに関係性の中で成立するのか、その核心に迫るものだった。

特に印象に残ったのは、ケアが“応答”であるという点だ。相手が「誰も気にしない」と言い放つ瞬間、その言葉の背後には「本当は気にしてほしい」という沈黙のメッセージが潜んでいる。Bの“I DO!!”という返答は、その沈黙に対する応答であり、関係を結び直す行為だと感じた。そしてそれは単なる言語的なやりとりではなく、存在そのものとして「私がここにいる」という応答なのである。

さらに、現象学やゲシュタルト理論を用いてケアの構造を図と地の関係で説明していた点は非常に興味深かった。人は常に、表には現れない他者のまなざしに影響されながら自分を形成している。そしてケアとは、その見えない他者の「地」としてはたらく存在に、もう一度光をあて、再び「図」に引き上げる行為なのではないかと感じた。

また、デリダの贈与論を援用して、「現れないケア」「返礼のない贈与」としてのケアを提示していた点には深い示唆があった。ケアは見返りを求めてはならず、相手に知られてもならない。そこにあるのは、時間をかけること、応答し続けること、その持続性にこそケアの本質が宿るという主張には、重たくも強い共感を覚えた。

筆者が「重苦しい結論に至った」と率直に記すように、この文章は慰めや答えを与えるものではないかもしれない。だがその代わりに、読む者が自分自身の中にある「誰かを気にかける気持ち」を、肯定してくれる力を持っていると思う。読み終えた今、私自身が誰かの“Who cares?”に対して“I DO”と応えられる存在でいたいと、強く願うようになった。

このような深い問いを共有してくださった筆者に、感謝の気持ちを込めて。

おすすめグルメ

川越の隠れ家カフェ『カフェテラス ロッジ』で、心あたたまるとときを

川越市野田町に佇む『カフェテラス ロッジ』は、まるで別荘地のペンションを思わせるログハウス風の建物が目印の、温もりあふれる喫茶店です。県道160号線沿い、川越自動車学校の向かいに位置し、5台ほどの駐車スペースも完備されています。

ログハウス調の木のぬくもりが随所に感じられる店内は、白熱灯の柔らかな灯りに包まれた居心地の良い空間。広々としたテーブル配置や緑のあしらい、手作り感のある内装が、訪れる人の心を自然と和ませてくれます。

